



Title	在宅高齢者の外出行動からみた地域環境整備に関する日韓比較研究
Author(s)	梁, 在濬
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42153
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	染在濬
博士の専攻分野の名称	博士(工学)
学位記番号	第15497号
学位授与年月日	平成12年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 工学研究科建築工学専攻
学位論文名	在宅高齢者の外出行動からみた地域環境整備に関する日韓比較研究
論文審査委員	(主査) 教授 舟橋國男 (副査) 教授 柏原士郎 教授 吉田勝行 助教授 鈴木毅

論文内容の要旨

本論文は、在宅高齢者の外出行動実態とその要因を明らかにし、都市・地域環境整備のあり方を検討するために、日本の大阪市ならびに韓国の釜山市を対象として日韓比較考察を行っている。

1章では、本研究の目的、背景について述べるとともに、本研究と関連する既往研究を分類・整理して、研究の位置づけを行っている。

2章では、比較研究の背景となる、人口高齢化の特性、高齢者福祉政策、高齢者の経済状況ならびに余暇活動、高齢者に配慮したまちづくり政策等の傾向に関する基礎的状況を調べ、両国・両市間における異同を明らかにしている。

3章では、各市の「老人大学」参加者に対する外出行動質問紙調査の結果、公園、銭湯、市場・スーパーマーケットなどの利用行動に相違が見られることを明らかにしている。さらに、高齢者の生活行動における地域環境の位置づけ、他者や地域環境との間に築かれた関係について、各市のそれぞれ2地域における計89名に対する詳細な面接調査によって考察を加えている。以上に基づいて、交流の空間的拡がりの型を、外出の目的、他者との関係の有無、交流場所の広がりによって分類した結果、5つの型が抽出されている。以上の結果から、外出行動とそれに伴う交流活動を促進もしくは阻害する要因を考察し、個人的属性、地域環境、移動環境にまとめている。

4章では、高齢者の外出場所として重要な意義をもつ公園について、高齢者による利用実態と環境評価を明らかにするため、各市についてそれぞれ3ヶ所の公園において、高齢者の行動観察ならびにヒアリング調査を行っている。その結果、公園利用行動には、両市とも休息、対話、運動が見られ、さらに釜山では娯楽、購買・観覧、歌・踊り、掃除等が、大阪では購買、趣味、自転車乗りが認められている。来園目的に基づく数量化III類による利用者タイプ分類の結果、釜山では「多目的」・「休息」・「娯楽」の3タイプに、大阪では「多目的」・「見物・行楽」・「散歩」の3タイプにそれぞれ判別されることを明らかにしている。公園の環境評価については、両市とも長所としては緑・空気など自然環境に関連する評価が高く、一方、短所として釜山では降雨対策の欠如、大阪では塵芥処理不足が強く指摘されている。

5章では、前述の結果をまとめるとともに、地域環境整備に関する検討を行い、情報交換や地域住民との交流が出来るような施設機能の複合化・多様化、居場所の確保と社会的交流の促進、場所の位置付けを明確にすることが、今後の様々な地域計画にとって重要であると指摘している。

論文審査の結果の要旨

高齢者数ならびに人口構成に占めるその割合の増加に対応する社会的ならびに物理的な環境の整備は、多くの国々において重要な問題となりつつある。特に、相応の心身機能を保っている在宅高齢者は相対的に多数を占めており、その健常な生活の継続にとって、日常生活圏における生活行動と地域生活環境との関わりに基づく環境整備が求められている。

本論文は、この観点から、社会・文化的状況の異同に留意しつつ、韓国の釜山市と日本の大阪市との比較を通して、それぞれの地域における在宅高齢者の日常的な外出行動の実態とその要因を比較検討し、地域環境整備の指針を得ようとするものである。得られた主な成果は以下の通りである。

- (1) 人口の高齢化、高齢者福祉政策、高齢者の生活経済実態、余暇活動、ならびに高齢者に配慮したまちづくり政策等の傾向に関する基礎的状況を調べ、両国・両市間における異同を検討して、研究の背景となる状況を比較的に明らかにしている。
- (2) 各市の「老人大学」参加者に対して外出行動質問紙調査を行い、公園、銭湯、市場・スーパー・マーケットなどの利用行動における両市間の相違を明らかにした上で、さらに、各市のそれぞれ2地域における詳細な面接調査によって、高齢者の生活行動における地域環境の位置づけ、他者や地域環境との間に築かれた関係について考察を加えている。
- (3) 以上に基づいて、在宅高齢者にみられる交流の空間的拡がりの型を、外出の目的、他者との関係の有無、交流場所の広がりによって分類した結果、5つの型が抽出されている。この結果から、外出行動とそれに伴う交流活動を促進もしくは阻害する要因として、個人的属性、地域環境、移動環境にまとめ、それについて考察を加えている。
- (4) 在宅高齢者の外出場所として重要な意義をもつ公園について、高齢者の行動ならびに意見等に関する詳細な調査を行い、高齢者による利用実態および環境評価を明らかにしている。利用行動については、休息、対話、運動といった両市に共通するものの他、釜山ならびに大阪それぞれに特有の行動傾向を見いだすとともに、来園目的に基づく利用者タイプ分類結果にも、両市間に差異があることを示している。さらに、公園の環境評価については、両市に共通する自然環境に対する高い評価、釜山の降雨対策欠如、大阪の塵芥処理不足等の指摘を得ている。
- (5) 以上の結果に基づいて地域環境整備に関する検討を行い、高齢者相互の情報交換や地域住民との交流が出来るような施設機能の複合化・多様化、居場所の確保と社会的交流の促進、場所の位置付けの明確化等、今後の地域計画にとって重要な指針を指摘している。

以上のように、本論文は、従来研究成果の十分ではなかった在宅高齢者の外出行動実態とその要因を比較検討して明らかにし、それらに基づく地域環境整備の指針を示しており、建築計画学、特に、高齢者生活環境計画の発展に寄与するところ大である。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。